

「災間社会」に生きる —「伝える」新聞記者の使命—

取材先：神戸新聞社 編集局 報道部長 長沼隆之氏 取材 大石祥子・末常生英・福島有紀哉・森島みなみ

「遺体の写真を撮っていたのか、その葛藤の中でずっと過していた。震災発生直時をこう振り返るのは、神戸新聞社の長沼隆之さん(53)。当時入社5年目の記者。現在は報道部長を務めている方だ。

災間社会に生きる

これから災害遭う人、未来の被災者である。災害が来ると、震災から次の災害までの間の社会に生きているという意味を含めた「災間社会」。26年前の今日(17日)のことを教訓とするために、長沼さんはこれらの言葉を、使って「備える」ことの大切さを伝えている。「災間社会」に生きる「未災者」の私たちが、いつ災害が起きてもおかしくないという危機感をもたらし言葉であり、備え、生き抜くことの難しさに気が付かされる。

新聞の力

長沼さんは、新聞の持つ力を「情報伝達ツール」という言葉で喩えていた。被災地となった神戸で「伝えなければいけない」という記者としての使命感を語った。

「遺体の写真を撮っていたのか、その葛藤の中でずっと過していた。震災発生直時をこう振り返るのは、神戸新聞社の長沼隆之さん(53)。当時入社5年目の記者。現在は報道部長を務めている方だ。」

「遺体の写真を撮っていたのか、その葛藤の中でずっと過していた。震災発生直時をこう振り返るのは、神戸新聞社の長沼隆之さん(53)。当時入社5年目の記者。現在は報道部長を務めている方だ。」

「遺体の写真を撮っていたのか、その葛藤の中でずっと過していた。震災発生直時をこう振り返るのは、神戸新聞社の長沼隆之さん(53)。当時入社5年目の記者。現在は報道部長を務めている方だ。」

「遺体の写真を撮っていたのか、その葛藤の中でずっと過していた。震災発生直時をこう振り返るのは、神戸新聞社の長沼隆之さん(53)。当時入社5年目の記者。現在は報道部長を務めている方だ。」

断層の巣と共に強く生きる

取材先：北淡震災記念公園 総支配人・語りべ 米山正幸氏 取材 芝光彩・谷口浩都



兵庫県淡路市(旧北淡町)にある北淡震災記念公園を訪ねた。まず目を奪われたのは、実物の野島断層と一緒に展示されている説明文と模型、様々な角度から撮影された震災当時の写真だ。野島断層は、平成7年1月17日午前5時46分、兵庫県南部を震源として発生した「兵庫県南部地震」の震源となった活断層の一つである。北は江崎灯台付近から南は富島地区まで、長さ約10キロにわたって続いている。断層の長さや地震の大きさと比例しているため、将来発生する地震の規模を推定することが可能だ。近畿地方は断層の巣と呼ばれており多くの断層が存在する。約2000年周期で動くといわれており、それらはたった10秒で破壊

芝光彩・谷口浩都 坪内壽音・横山拓也

「阪神淡路大震災でも、都会の神戸と田舎の淡路には差が出た。そう語ったのは、北淡震災記念公園の総支配人であり、語りべでもある米山正幸さんだ。米山さんは、生後2か月の娘と妻の3人で寝ている時に阪神淡路大震災にあった。当時米山さんは地元の消防団に所属しており、発生後すぐに救出活動を開始したそう。北淡町では39人が

「阪神淡路大震災でも、都会の神戸と田舎の淡路には差が出た。そう語ったのは、北淡震災記念公園の総支配人であり、語りべでもある米山正幸さんだ。米山さんは、生後2か月の娘と妻の3人で寝ている時に阪神淡路大震災にあった。当時米山さんは地元の消防団に所属しており、発生後すぐに救出活動を開始したそう。北淡町では39人が

「阪神淡路大震災でも、都会の神戸と田舎の淡路には差が出た。そう語ったのは、北淡震災記念公園の総支配人であり、語りべでもある米山正幸さんだ。米山さんは、生後2か月の娘と妻の3人で寝ている時に阪神淡路大震災にあった。当時米山さんは地元の消防団に所属しており、発生後すぐに救出活動を開始したそう。北淡町では39人が

共に生きる住まいづくり —「安心」を「耐震」から—

取材先：一級建築士 川崎史氏 取材 大石祥子・末常生英・福島有紀哉・森島みなみ

「耐震工事後に、前はめっちゃ揺れたのに全然揺れなくなった。川崎史さんは一級建築士。神戸で37年間に渡り、建築設計監理に携わっている。天災がないと思われて

「耐震工事後に、前はめっちゃ揺れたのに全然揺れなくなった。川崎史さんは一級建築士。神戸で37年間に渡り、建築設計監理に携わっている。天災がないと思われて

「耐震工事後に、前はめっちゃ揺れたのに全然揺れなくなった。川崎史さんは一級建築士。神戸で37年間に渡り、建築設計監理に携わっている。天災がないと思われて

「耐震工事後に、前はめっちゃ揺れたのに全然揺れなくなった。川崎史さんは一級建築士。神戸で37年間に渡り、建築設計監理に携わっている。天災がないと思われて

「耐震工事後に、前はめっちゃ揺れたのに全然揺れなくなった。川崎史さんは一級建築士。神戸で37年間に渡り、建築設計監理に携わっている。天災がないと思われて

「寄り添うことも大切だけど、自ら引っぱることも大切」

取材先：神戸・三宮センター街一丁目商店街振興組合 副理事長 植村一仁氏

震災未体験世代である私たちがよりリアルな震災の姿を知るため、神戸・三宮センター街一丁目商店街振興組合の副理事長 植村一仁さんに当時の話を伺った。

Q：植村さん、震災当時の様子をお聞かせください。

「遺体の写真を撮っていたのか、その葛藤の中でずっと過していた。震災発生直時をこう振り返るのは、神戸新聞社の長沼隆之さん(53)。当時入社5年目の記者。現在は報道部長を務めている方だ。」

「遺体の写真を撮っていたのか、その葛藤の中でずっと過していた。震災発生直時をこう振り返るのは、神戸新聞社の長沼隆之さん(53)。当時入社5年目の記者。現在は報道部長を務めている方だ。」

「遺体の写真を撮っていたのか、その葛藤の中でずっと過していた。震災発生直時をこう振り返るのは、神戸新聞社の長沼隆之さん(53)。当時入社5年目の記者。現在は報道部長を務めている方だ。」

書評

文章 末常生英

神戸新聞の100日

「午前5時46分。この言葉が響き渡った。震災を経験していない若者でも神戸の人間であれば、誰もがあの日のことを思い出す。私も短距離でつくらなアカン」「ぶっつけ本番」と彼の焦りや憤りを自分のことのように感じられた。震災当時の様子をここまで詳細かつリアルに描かれて



取材先：NPO法人プラス・アーツ 理事長 永田宏和氏

遊ぶように、防災を学ぶ。

「震度7に堪えられる保証はないかと私は思った。神戸市の耐震化の補助制度の対象となるのは、昭和56年以前に建てられた住宅。そのような家に住んでいるのは多くが高齢者で、耐震化を勧めても断られることが多いという。高齢者の方にとっては、お父さんもお母さんが出て行って自分だけとなると、もう「耐震化」せんでええねん」という心境になる。もう一つ死ぬかわからへんと言った。震災経験のある高齢者の方に、私たちが改めて

「震度7に堪えられる保証はないかと私は思った。神戸市の耐震化の補助制度の対象となるのは、昭和56年以前に建てられた住宅。そのような家に住んでいるのは多くが高齢者で、耐震化を勧めても断られることが多いという。高齢者の方にとっては、お父さんもお母さんが出て行って自分だけとなると、もう「耐震化」せんでええねん」という心境になる。もう一つ死ぬかわからへんと言った。震災経験のある高齢者の方に、私たちが改めて

メンバー紹介

- 学生記者 大石祥子 / 岡田敏和 / 鎌田春風 芝光彩 / 末常生英 / 谷口浩都 坪内壽音 / 出口真愛 / 福島有紀哉 森島みなみ / 横山拓也
- ライティング補助 吉本圭輔 (トウモロゲート株式会社)
- デザイン すみかずき (KEYDESIGN)
- 企画 主催：神戸市建築住宅局耐震推進課 共催：(一財)神戸すまいまちづくり公社